

日本語習得者が作る日本語文法

ダニエル・ロング (首都大学東京)

要旨

非母語話者が言語を習得する場合、彼らは目標言語の文法体系を創生する。これは母語話者の文法体系に近いとは言え、独自のものである。本稿では、複数の言語コミュニティからの具体例を取り上げながらこうした中間言語現象を検証していく。中間言語の下位分類には、学習者の母語が習得の邪魔となる「母語干渉」(負の転移)による特徴がある。「直接的干渉」は直訳によるもので、例えば小笠原欧米系島民が使う「またみるよ」(また会おうね)という挨拶ことばに見られる。一方、「間接的干渉」が、戦前の日本語教育を受けたサイパン島のチャモロ語話者が使う日本語に見られる。彼らの間に「作り上げられた」文法では属格「の」の使い方が標準語と異なる。標準語の規則は「前の修飾語が形容詞や動詞なら「の」は挟まないが、前の修飾語が名詞であれば「の」は挟む」であるのに対し、彼らの中間言語規則では「うしろの被修飾語が「とき」であれば「の」を挟まないが、それ以外の名詞であれば「の」を挟む」となっているようである。「チャモロ語の○○という表現を直訳していることが誤用の原因だ」という指摘はできないが、チャモロ語において「とき節」といわれる「関係節」(日本語の連体修飾に当たる)の文法構造が異なるという事実は無関係だと考えられないので、間接的に母語が正確な日本語習得を邪魔していると言えよう。これ以外にも、原因が習得者の母語にはない中間言語の特徴として、「過剰識別」や「パラダイムの合理化」、「過剰般化」を取り上げる。

キーワード：中間言語、言語転移、言語干渉、日本語教育、第二言語習得

Japanese Grammar Created by Nonnative Learners

Daniel LONG (Tokyo Metropolitan University)

Abstract

When Nonnative speakers acquire a language, they create their own grammar, albeit one which closely resembles that of native speakers. This is interlanguage, a

concept which I elaborate on in this paper using examples from my own fieldwork in language contact communities. One type of interlanguage feature are those which result from interference (negative transfer) caused by the learners native tongue. Direct transfer can be seen in expressions such as *mata miru yo* used by the "Westerners" of the Ogasawara Islands. The phrase is a direct translation of the English *see you again*, whereas the natural Japanese would be *mata aō* (lit. let's meet again). Another subtype of interference may be termed "indirect". For example, on the Northern Marianas Islands, Chamorro native speakers who acquired Japanese before the war seem to have a different rule about the usage of the genitive case marker *no*. Their interlanguage rule would read something like "if the modified noun is *toki* 'when', then do not use a genitive marker; if the modified noun is any other noun, then use the genitive maker *no*." The Japanese rule is based not on the nature of the modified word, but the modifying word. There is nothing in this interlanguage that we can point to and label a direct translation from Chamorro, yet the fact that Chamorro places 'when' expressions in a different category than other 'relative clause' modifiers indicates the indirect interference of that language. I also examine interlanguage phenomena which can not be attributed to the influence of the learner's native tongue, such as hyperdistinction, paradigm uniformization or overgeneralization.

Keywords: interlanguage, transfer, interference, Japanese language education, second language acquisition

1. 習得者が作った文法(中間言語)の下位分類

本稿では、目標言語を習得する過程で、第二言語習得者が自ら作り上げる文法体系を、その個々の文法事項から考察する。こうした中間言語的文法事項は目標言語の正しい文法とは異なるが、規則性(ある程度)見られる以上は、文法体系の一部として扱うことが可能である。

ここで「中間言語」の意味範囲およびその中身について筆者の考え方を述べる。中間言語は「第二言語習得者が頭の中で持っている言語体系」と定義することができる。これが広義の中間言語と言える(表1)。習得者が目標言語を間違えずに理解し、習得する言語的要素は「正用」と分類される。これらが中間言語研究の対象とされることはないが、それでも中間言語の一部分ではある。やはり研究者の注目を集めるのは誤用の部分である。誤用の中に

は規則性が見出せる要素と恣意的にしか見えない要素がある。恣意的に思われる中間言語的な文法事項の中には、研究が進めば、将来、その規則性がみつかるものも入っているかもしれないが、現段階では、恣意的なものとして扱わざるを得ない。

表1 中間言語の下位分類

| 非母語話者が持つ第二言語の言語体系(広義の「中間言語」) | | | | | |
|------------------------------|--------|----------|------------|--------|------|
| 正用 | 誤用 | | | | |
| | 恣意的な誤用 | 規則的な誤用 | | | |
| | | 原因が母語にある | 原因が目標言語にある | その他の原因 | 原因不明 |

誤用の原因を探ると、母語に起因するものも、目標言語に起因するものもある。ただし、この二つのうち、前者は従来の誤用分析の枠組みでも取り扱うことが可能であった。そのためか、「中間言語研究」と称するもののほとんどは表1で網掛け部分に当たる事象を対象にしているように思われる。以下では表1の下位分類の詳細を探っていく。

2. 直接的母語干渉

中間言語の特徴の原因が母語にある場合を検討しよう。言語転移には「正の転移」と「負の転移」があり、後者は母語干渉とも呼ばれる。母語干渉をさらに二種類に細分類できる。それは(1)母語の文法事項、意味範疇などが直接目標言語に持ち込まれ、当てはめられている「直接的干渉」と、(2)母語が何らかの形で目標言語の正確な使用の「邪魔」になっているが、それが「直訳」とは言えない「間接的干渉」である。

間接的母語干渉は次節で取り上げるが、ここでは直接的母語干渉を「第二言語習得者が母語の単語や文法事項を目標言語に直訳した結果生じた誤り」と定義する。小笠原の欧米系島民のことばには「シャワーをとる」や「薬をとる」という表現が用いられる。これらは英語の“take a shower”, “take medicine”のそれぞれの直訳と思われる。数世代にわたり欧米系島民が日本語と英語を併用した結果、彼らのことばにはこうした中間言語的な特徴が目立つ。¹「久しぶりに友達を見た」や「また見るよ!」(また会いましょう)とい

¹ 筆者は10年ほど前から東京都の小笠原諸島に住む欧米系島民の言語調査を継続的に

う言い方も聞かれる(表2)。つまり、単語の形式(ミル)は日本語だが、それは表面的なことだけであって、深層にある意味領域はむしろ英語に似ていることが分かる。

表2 小笠原ことばに見られる中間言語的特徴(直接的母語干渉)

| 英語 (元々の母語) | 小笠原欧米系島民のことば (中間言語) | 日本語 (元々の目標言語) |
|---------------|------------------------|------------------|
| see | ミル | 見る |
| meet | アウ | 会う |

3. 間接的母語干渉

間接的母語干渉は、その名の通り、母語が目標言語に及ぼしている影響が直接的ではない現象を指す。日本人が話す英語の例を出すと、三人称代名詞の he と she を混乱する誤用が挙げられる。(これは「誤り = error」というよりは「間違い = mistake」だと思われる。日本人の間では単なる口すべり現象と認識されており、記憶に残りにくい所為か、話題に上らないが、滞日英語圏人の間ではたびたび話題になる特徴である。)この誤りの原因は話者の母語(日本語)にあると言える。しかし、前節で見たような直接的母語干渉としては説明できない。

例えば、「薬をトル」という誤りの原因について、<英語では take medicine と言う。Take は日本語でトルと言う。だから「薬をトル」と言っているだろう。>のような推理ができる。

一方、日本人の「he・she の混交」の原因はむしろ次のような間接的な影響であろう。日本語でカレ・カノジョの三人称代名詞はさほど使われず、む

行なっている。彼らの先祖が江戸時代に無人島だったこの島に住みついた。2世、3世になっていた明治時代に島が日本の領土となって、彼らは日本に帰化した。1870年代から日本語と英語とのバイリンガリズムが若者を中心に広がったが、半世紀経った1920年になっても、彼らの家庭言語、(欧米系集落内の)コミュニティ言語は英語であった。すなわち、かなり長い年月にわたって彼らの脳裏に英語と日本語が「共生」していたことになる。1930年代に入り、英語が劣勢に立ち始めたが、(英語にとって)ちょうど良いタイミングで終戦を迎えた。というのは、1945年から米海軍の統治下に置かれることになって、廃り始めた英語が復活を果たしたからである。1968年に日本に返還され、日系島民が帰島し、学校教育などの公の場で日本語が再び使用されるようになった。(ロング2010b, Long2007)

しろ人物の名前や肩書き、あるいはゼロ形が多い。例えば“*She said to give you her best*”の場合、「彼女が宜しくと言っていたよ」というよりは、「日比谷さんが宜しくと言っていたよ」や「副学長が宜しくと言っていたよ」あるいは「宜しくとおっしゃっていたよ」となるのが一般的である。日本語では性別を明確にする言い方が使われないことが多いことから、日本人が英語を話すときに、性別によって使い分けなければならない英語の *he* と *she* を一瞬間違えるのである。これが間接的母語干渉である。

なお、誤解を避けるために強調したいのだが、別に「間接的母語干渉」が「間違い」になると言っているわけではなく、むしろ母語干渉の「直接的・間接的」の違いと「誤り・間違い」の違いはまったく無関係であろう。

次に「間接的母語干渉」の「誤り」の例、しかも語彙ではなく統語論レベルの例を見よう。マリアナ諸島(サイパン、テニアン、ロタ)の年配者が話す日本語(いわゆる残存日本語)に見られる間接的母語干渉の例をここで時間をかけて紹介したい。データは新井(2008a, 2008b)の研究から取ったものである。以下では新井の分析(表3~5)に加えて、筆者がチャモロ語の影響(表6)について考察する。

新井は「の」による修飾を分析した際に、以下のような正用と誤用の両方が混ざっていることに気づいた(表3)。

表3 マリアナ諸島戦前生まれ話者に見られる連体格「ノ」の使用例

| | | | |
|--------|-----------|--------|-------|
| 学校の生徒 | 静かとき | 昔の歌 | 新しいの窓 |
| 忙しいとき | 簡単な日本語 | 赤ちゃんとき | 色々の仕事 |
| 戦争するとき | 違うのやり方 | 浴びるの石鹸 | 軍隊の命令 |
| 作るの人 | 甘蔗絞るのマシーン | | |

一見恣意的に見えるこの使用だが、よく観察すると規則性があることに気づく。その話をする前にまず、日本語の「の」による修飾のルールを簡単に見てみよう(表4)。日本語では、まず、前の要素に注目する。前に来るものが名詞であれば、そのうしろに「の」を入れる。前に来るのが形容詞であれば、うしろに何も入れない。

表4 標準語の連体格「ノ」のルール

| IF…(前に来るのがこれであれば) | THEN…(以下の作業を行なう) | 例 |
|-------------------|------------------|-----------------------|
| 名詞 | 「の」を入れる | 学校の友達, 学校の時 |
| 形容動詞 | 「な」を入れる | 静かな友達, 静かなとき |
| 形容詞 | 何も入れない | 忙しい友達, 忙しいとき |
| 動詞 | 何も入れない | 勉強している友達, 勉強しているとき |

一方、表3にあるマリアナ諸島の話者の日本語(中間言語)をよく見るとそれなりの規則性があることに気づく。それは、「とき」の表現とその他の一般名詞の連体修飾との区別があり、後者の場合は被修飾語である名詞の前に「の」が挿入される。前者の場合は「とき」の前に何も挿入されない(表5)。

表5 チャモロ語母語のL2日本語話者に見られる連体格「ノ」のルール

| 例 | THEN…(以下の作業を行なう) | IF…(うしろに来るものがこれであれば) |
|---------|------------------|----------------------|
| 学校の生徒 | 「の」を入れる | 一般の名詞 |
| 簡単な日本語 | | |
| 新しいの窓 | | |
| 絞るのマシーン | | |
| 赤ちゃんとき | 何も入れない | 「とき」形式名詞 |
| 静かとき | | |
| 忙しいとき | | |
| 戦争するとき | | |

新たな識別(次節参照)が行なわれているが、それだけではない。文法規則が大胆に書き直されている。文法構造(の一部)が再構築されているのである。しかも、その原因はどうも一つではなく、多面的であり、日本語の文法事項の誤解(一種の過剰般化)も関係していると思われるが、彼らの母語であるチャモロ語も大いに影響を与えていると考えるべきであろう。

実はチャモロ語では「とき」に当たる文法事項は、他の場合の複文(日本語で言えば動詞による名詞の連体修飾)との作り方が違う(表6)。

表6 チャモロ語で日本語の連体修飾に当たる表現と「とき」に当たる表現

| | | |
|---|---|----------------|
| 1 | H.um.anao yo' anai matto gue'. ² Go-AI-go I when come he | 彼が来たとき私は帰った。 |
| 2 | I p.um.añiti i lahi palao' an malagu. Art hit-AI-hit Art man woman run | 男を殴った女が走った。 |
| 3 | I k.um.anno' i asuli patgon matai. Art eat-AI-eat Art eel child die | うなぎを食べた子供が死んだ。 |

表6には、日本語の「○○するとき・・・」に当たる構文(6-1)と日本語の連体修飾に当たる構文(6-2, 6-3)が見られる。例文はそれぞれ Topping (1980: 148, 313, 314)のチャモロ語文法書から取ったものである。詳しい解説は省くというよりもロングはチャモロ語文法に詳しくないが、ポイントは以下の2点である。

- ・日本語では(1)「とき」表現と(2)一般の連体修飾に同じ構文が使われる
 - ・チャモロ語では(1)日本語の「とき節」に相当する表現と(2)日本語の「とき節」以外の連体修飾に相当する表現に違う構文が使われる
- 表3で見たマリアナ諸島の話者の誤用を説明するときに、「チャモロ語の○○という文法事項が直訳された」と言えるわけではないので、直接的母語干渉ではない。しかし、「とき節」が連体修飾節の一種に過ぎない日本語と、「とき節」が一般の修飾節とは構造的に違うチャモロ語の違いが、マリアナ話者が生み出した区別の背景にあるように思われる(ロング2008)。ここで検討した特徴に間接的干渉が関与していると言えよう。

4. 過剰識別

以上見てきた連体修飾節の中間言語現象では、日本語でなされていない新たな文法的識別(<ときの場合>対<一般名詞の場合>)が見られた。過剰識別は、目標言語に実際に存在しない文法的、意味論的などの区別を、習得者があるように解釈する場合である。

ここで、自分自身のフィールドワークから「過剰識別」に当たる特徴を紹

² ここで hanao, pañiti, kanno' はそれぞれ「行く」、「殴る」、「食べる」を意味する動詞で、um は「動作主接中辞」(Agent Infix = AI)である。Art は冠詞。

介したい。これは文法事項ではなく、語彙体系の意味論的な過剰識別であるが、この下位分類の例としては十分なものであろう。

小笠原の欧米系島民にとって、日本語習得は一回の出来事ではなく、一世紀にわたる長い道のり(プロセス)であった。言ってみれば、小笠原欧米系島民の中間言語は100年間も(変化しながらも)存在し続けているのである。

欧米系島民は「ウマイ」と「ウンマイ」を意味の上で区別し、別々の単語として使い分けている。表7で橋本直幸と一緒に編集した『小笠原ことばしゃべる辞典』(2005)から、実際の会話例を紹介したい。

表7 小笠原ことばにおける「過剰識別」

| |
|--|
| A: No, 「おいしい」ということウンマイ。 |
| B: No! ウンマイじゃないんだって、ウマイ。Me たちはウンマイ。 |
| A: ウマイって上手ということだじゃ。 |
| A と C: (同時に)ウマイネ! |
| A: と言うじゃ。That means that you're really good. ウマイは。ウンマイ is "Oh, delicious". |
| B: そうかい? 使ってないからウンマイ。 |
| A: ウンマイは "Oh, it's so good!". |
| C: We used to talk like that. What happen you? |
| A: 変わったよ、これ。 |
| B: Because I come here... |

補足説明をすると、A氏、B氏、C氏は3人共島に生まれ育った欧米系島民である。3人とも日本への返還(1968年)とともに島を離れて、以来アメリカで暮らしているが、録音の時点(2004年4月)では小笠原に帰って来ていた。Bは「ウンマイ」は内地(日本本土)の日本語と異なる「小笠原ことば」であると主張している。Aは、そうではなく、「ウンマイ」と「ウマイ」とは別のことを指しているのだと主張している。内地のことばは知らない(むしろ内地のことばに関心がない)けど、少なくとも小笠原のことばではそうなんだ、と言い張っている。CはAの解釈に同意している。さらにCとAは一緒になってBを「自分のルーツを忘れた」裏切り者として非難している。Bは、返還後の島(すなわち、内地の日本語に染まってしまった時代の島)をしょっちゅう訪ね、滞在しているから染まってしまった、と言いつけているのである。

5. パラダイムの合理化

規則的な誤用の原因が目標言語にある特徴として、他の文法事項への類推が働いている点が挙げられる。「類推」の中に「パラダイムの合理化」と「過剰般化」の二つの現象があるが、明確に区別されることは少ないように思う。ここで筆者なりの考えを説明したい。

パラダイムの合理化が起きるのは、文法的な枠組み(図示できるような対応性のある事象)が存在するがいくつかの穴(例外、空白)が空いている場合である。明らかに例外となっている部分を例外扱いせず統一してしまう学習者が、パラダイムの合理化に寄与している。パラダイムの合理化では、例外的な要素が、規則的な部分への類推によって統一される。過剰般化の場合にも類推がメカニズムになっている。しかし、過剰般化の場合、B類のA類への類推によって、B類がA類に同化すると言っても、だからと言ってB類がそれまで「例外的」なものだったというわけではない。パラダイムの合理化の場合、パラダイムの明らかな空白(例外)があり、それを埋めるように統一が行なわれるのである。

抽象的な説明よりも、具体例を提示した方が分かりやすいので、まずパラダイムの合理化の例を紹介したい。長友和彦が1993年の論文で形容詞の過去形「～いでした」を中間言語現象として分析している。これは彼のデータにたまたま現れたものではけっしてなくて、様々な言語を母語とする日本語習得者に見られる文法事項である。私もこれに興味を持っている。数年前から、小笠原との比較を行なうために沖縄県の南大東島に通い続けている。そこで公の場で村長がこう言っていた「今日の^{いんげんげい}演芸会はとても楽しいでした」(ロング2010a)。

沖縄は日本国内だからその人々が話す日本語は中間言語とは違う、と考える人はいるだろう。しかし、19世紀まで沖縄や奄美など琉球地域で話されていたことばは本土の日本語の変種というよりは、本土諸方言の姉妹言語である。そう考えれば、沖縄の人々にとって(少なくとも一世紀前の人々にとって)標準語は自分たちの母語と相互理解のない「外国語」であった。彼らが標準語を習得することは第二言語習得だった。そうならば、日本語を第二言語として覚えた世代の言語体系は中間言語であり、そしてそれが彼らの

子孫の母語となった現在においても、中間言語的な特徴として多く残っている。

上で見た「形容詞のイ形+デシタ」は他の言語を母語とする人の日本語にも見られる特徴である。そしてこれは「パラダイムの合理化」に当たる例でもある。その類推過程は分かりやすい。指定助動詞「だ」の現在形の場合は名詞、形容動詞、形容詞ともに「です」になる。不確定などのモダリティを現す文法事項としても、品詞とは無関係に「でしよう」が使われる。しかし、過去形になると形容詞だけが例外となり、「楽しかったです」にしなければならないわけである。沖縄の人が話す「標準語」(ウチナーヤマトウグチ)は、中間言語に起因する「パラダイムの合理化」の特徴が見られる(表8)。

表8 指定助動詞の活用パラダイム(標準語とウチナーヤマトウグチ)

| | 現在形 | 「でしよう」形 | 過去形 |
|------|--------|----------|-----------|
| 固有名詞 | 岩崎です。 | 岩崎でしよう。 | 岩崎でした。 |
| 名詞 | 車です。 | 車でしよう。 | 車でした。 |
| 形容動詞 | 静かです。 | 静かでしよう。 | 静かでした。 |
| 形容詞 | 楽しいです。 | 楽しいでしよう。 | (楽しいでした。) |

奄美は沖縄と似たような琉球語の変種を基盤言語とした中間言語を使っている。これが「トン普通語」と呼ばれている。標準語で、「られる」敬語のパラダイムには空白(例外)があるが、奄美で使われる標準語(トン普通語)ではこの空白が埋められ、パラダイムが完成する(表9)。

表9 「られる」敬語のパラダイム(標準語とトン普通語)

| 文法事項 | 例文 | 標準語 | トン普通語 (中間言語) |
|------|----------------------------|-----|-----------------|
| 現在形 | 海外はよく行かれるみたいですよ。 | ○ | ○ |
| 過去形 | この間名瀬に行かれたときどうでした? | ○ | ○ |
| 疑問文 | 喜界島も行かれましたか? | ○ | ○ |
| 断定文 | でも笠利の空港から行かれましたよね。 | ○ | ○ |
| 否定形 | 来年は行かれないんですか? | ○ | ○ |
| 依頼文 | (奄美パークは面白いから今度ぜひ行かれてください。) | × | ○ |

6. 過剰般化

最後に過剰般化の例を紹介しよう。

小笠原の欧米系話者が起こした過剰般化とその結果起きた言語変化の例を紹介しよう。小笠原には、八丈島方言から伝わったホゲルという動詞がある。八丈島で「ホゲル」は「散らかす」を意味する他動詞で、「部屋をほげるな」のように使われる。小笠原でホゲルをこの本来の意味で使う人はいまだにいる。しかし、戦後生まれの欧米系島民の間では「ホゲル」が自動詞に変わり、「部屋がほげているから大変だ」のように使われている。この世代は「車の中をほがしたら怒られるよ」のように他動詞「ホガス」を造った。この背景には「類推」が働いていると思われる。すなわち、「ホゲル」は本来他動詞だったが、「燃える」や「焦げる」、「増える」など「-eru」で終わる多くの自動詞をみて、「-eru」は自動詞の標識だと、過剰な一般化をした。そして、これらと対になっている「-asu」で終わる他動詞(燃やす, 焦がす, 増やすなど)が数多く存在することから、「ホガス」という単語もあるに違いない、と考えたのであろう。

前節で紹介したパラダイムの合理化と同様、過剰般化も類推がキーワードになっているが、パラダイムの合理化に見られたような明らかな「例外」があったり、図式に空白がありそれが埋まっていく、というわけではない。欧米系話者がこのような言語変化を起こしたのは、直接英語の影響だとは言えない。しかし、小笠原で起きたこの文法変化は日系島民ではなく、欧米系島民の間である点が重要であろう。すなわち、彼らの日本語の文法能力が部分的、あるいは不完全な自信のないものだった、また彼らの日本語に対する規範意識が薄かったなどの要因が、変化の起こりやすい「地盤のゆるい」環境を作っていたと思われる。

さて、ここでもう一つの移民系社会を紹介しよう。沖縄県の石垣島には500人あまりの台湾系島民がコミュニティを構成して暮らしている(松田2004)。戦前(植民地時代後期に当たる1930年代)に日本語による教育を受けた人もいるが、多くは自然習得者である(ロング & 新井2008)。表10に彼らが話す日本語の中間言語的特徴をいくつか示す(ロング・他2010)。

表 10 石垣島の台湾系島民の日本語に見られる中間言語現象

| 現象 | 例 | 原因の分類 |
|-------------|--|--------------------|
| 存在動詞使い分けの誤り | (人・動物が)アル→いる | 母語干渉 |
| 連体格の「ノ」の挿入 | ホシイモノ→欲しいの物 | 母語干渉 |
| 連体格の「ノ」の省略 | ブラクヒト→部落の人 ³ イエナカ→家の中 アメリカトキ→アメリカの時 | 母語干渉 |
| 許可表現 | シナイトイイ→しないで良い | より分析的な文法形式 |
| 形容詞の否定形 | イイジャナイ→良くない | より分析的な文法形式 |
| 名詞+するの汎用 | 日本教育シタ→受けた 北京語シタリ→話したり 日本籍シナイ→取らない | 石垣のウチナーヤマトウグチの過剰般化 |
| カラの汎用 | (表 11 参照) | 石垣のウチナーヤマトウグチの過剰般化 |

最初の三つの特徴は話者の母語である閩南語(台湾語)の直接的な干渉だと思われる。まず、イル・アルに当たる区別が母語にない(つまり、存在動詞の主語が無情か有情による使い分けがない)ため、日本語で「人がある」という言い方が見られる。次に、「欲しい物」のような表現では修飾語と被修飾語との間に“e”(北京語の「的」に当たる機能形態素)が挟まれる。そして、「家の中」や「アメリカの時」の場合は逆にそうした形態素を挟まない。

「シナイトイイ」(しなくてもいい)はどういう特徴かと言えば、標準語に比べて「より分析的な文法形式」へと変わっているのである。標準語では屈折形態素の入れ替えが必要である。つまり、終止形シナイのイをクに変え、いわゆるテ形にし、そしてモを挟むという複雑な過程を経なければならない。それに比べ、中間言語の形式では、終止形シナイをそのまま使い、自由形態素のトを挟むだけで済む。これは習得者が初級レベルで身に着ける提案表現の「スルトイイ」への類推も採用される要因の一つとなっていると見られる。

「イイジャナイ」(良くない)は複数の観点から見る事ができる。上と同様、「より分析的な文法形式」に変わったと見る事が可能である。形容詞肯定形(例えば「悪い」、「暑い」)の否定形を作るには「い」と「く」の屈折形態素の交替をしなくてはいけない。(なお、「良い」の場合は語根を「イ」

³ この「部落」は、沖縄をはじめ全国各地で使われている「集落」一般の意味であり、被差別部落とは無関係である。

から「ヨ」に変えなければならないので、さらにやっかいな問題をはらんでいるのだが、そうした個別問題はここで取り上げずに、「形容詞の否定形」という一般的な文法事項の問題として捉えたい。)「イイジャナイ」という表現は二つの自由形態素の組み合わせからなっている、という主張が成り立つ(これが「イイ デス」や「留学生 ジャナイ」から分かるように)。なお、形態論からすれば「じゃない」を一つの自由形態素として考えるのは明らかに誤った解釈であるが、少なくともここで、習得者にとってこの「ジャナイ」は自由形態素に類似する「チャンク」だ、と言えるのである。

さらに、「イイジャナイ」という表現そのものは、ここでの使い方とは違うとは言え、日本語に存在しないわけではない。違った機能(意見の押し付けなど)とはいえ、同形式の表現を耳にすることによって、習得者が余計に混乱し、否定としての「イイジャナイ」への許容度アップにつながっている一つの要因であろう。

「名詞+する」の表現も目立つ。「日本教育を受けた」という意味で「日本語教育した」と言ったり、「防空壕に入った」という意味で「防空壕した」と言ったりする例が数多くある。これは石垣のウチナーヤマトグチの過剰般化であると思われる。というのも、石垣を含めて沖縄県では「昔方言したら怒られた」や「この会は最近不参加している」が一般的だからである。

興味深いのは「カラの拡張用法」である(表 11)。石垣の台湾系島民の発話には「籍入れてカラ自由できるでしょう?」(帰化して日本国籍になってから自由にできる)のような順接的因果関係を表している発話や、「(パインは)トゲあるカラ怖い」のような理由を表している発話が見られる。これは標準語の用法と変わらない。表 1 の分類で言えば「正用」に当たるから、これ以上取り上げない。

一方、標準語で使われない用法も数種類見られる。「欲しいの物カラよー、店に行って取って」のカラは、文脈(付記)を考慮すれば「多数の選択の中から」という意味ではないので、むしろ標準語の「を」に当たると判断できる。一見閩南語を母語とする話者の中間言語と思われるかもしれないが、この特徴が現れた理由は「台湾」ではなく、「沖縄」である。一般(非台湾系)の石垣島民の会話にもこうした用法がよく聞かれる。これは伝統方言からの転

移である。例えば沖縄本島なら「マーサシカラカメ」(美味しい物を召し上がれ)という言い方がある。石垣の伝統方言にもこれに相当する用法がある。そして、両地域のウチナーヤマトゥグチ⁴においてこうした「カラ」用法が見られる。

表 11 石垣島の台湾系島民の日本語に見られるカラの拡張

| 使用例(→標準語訳) | 意味 | 石垣 台湾人 | 沖縄 大和口 | 標準 語 |
|------------------------|------|-----------|-----------|---------|
| 籍入れてカラ自由できるでしょう? | 順接因果 | ○ | ○ | ○ |
| トゲあるから怖い | 理由 | ○ | ○ | ○ |
| 店人カラ[言われた] | に | ○ | ○ | △ |
| 欲しいの物カラよー、店に行って取って | を | ○ | ○ | × |
| 畑買ってカラ | ～て | ○ | ○ | × |
| パインカラ、サトウキビカラ | とか | ○ | ○ | × |
| 学校カラ覚えて | で | ○ | △ | × |
| 三男カラ沖縄におる→三男は沖縄にいる | は | ○ | × | × |
| 高校の先生カラ。→高校の先生よ。 | よ | ○ | × | × |
| 農業やろうかなあカラよ。→やろうかなあって。 | と | ○ | × | × |

また、「畑買ってカラ、農業やろうかな・・・」は文脈を見れば、順接的因果関係の「テカラ」ではなく、単なる「先行関係」を表していることが分かる。つまり標準語で言えば「畑買って、農業やろうかな・・・」に当たる。

⁴ 前節において述べたように、ウチナーヤマトゥグチ(沖縄大和口)は現在の沖縄の人が標準語として使っていることばである(高江州 1994, 大城・尚 2007)。柴田武の提唱した「地方共通語」という用語にも当たる現象である。ウチナーヤマトゥグチは(真田信治の言い方を使うと)地元言語(方言)のフィルターを通して習得した標準語である。そういう意味では正確に言えば、北琉球語の沖縄本島中南部方言が基盤言語になっている那覇のウチナーヤマトゥグチと、南琉球語の八重山方言が基盤言語となっている「石垣版ウチナーヤマトゥグチ」を別々のものとして扱い、後者を「八重山ヤマトゥムニ」と呼ばなければならない(かりまた 2009)。本稿ではそこまで詳しく取り上げることができないが、表 11にある「カラ」の使用に限って言えば、沖縄本島の伝統方言と石垣島の伝統方言との違いが問題になるほど大きくなかった。同様に、このカラに限って言えば沖縄のウチナーヤマトゥグチと石垣版ウチナーヤマトゥグチの使用法はさほど変わらない。したがって、本稿では二つの違いを問題にしない。なお、石垣・沖縄本島の違いの有無に関する判断、およびウチナーヤマトゥグチと伝統方言との関係に関する情報はすべて琉球大学のかりまたしげひさ教授によるものである。

同じような用法の例が「もう、毎日頑張ってから、農業やってるさー」など多数の発話に見られる。これも沖縄の伝統方言からの転移である。沖縄方言では(石垣方言と同様)、「先行」の意味で使われるのは「第三中止形」であり、当該地域の人が標準語のつもりで話しているときに、こうした表現が「テカラニ」に訳されるのである。

次に、「パインカラ、サトウキビカラ・・・」という例に見られるのは標準語の「とか・・・とか」に当たる羅列用法である。沖縄・石垣の伝統方言の羅列用法には「○○カラ○○カラ」が使用される。当該地域の人が標準語を話すとき、この用法が伝統方言から転移され、使われるのである。

そして、「店人カラ～(と言われた)」という発話に、ウチナーヤマトウグチで一般に使われている「カラ+受身」が見られる。伝統方言でこうした受身文の場合は「ニ」ではなく、「カラ」が使われる。そのため、ウチナーヤマトウグチの受身表現で「ニ」よりも「カラ」がよく用いられ、「知らない人から殴られた」のような言い方が(沖縄本島でも石垣でも)一般的である。

最後に、「子供たちは日本語は来てから覚えた?」と調査員に聞かれた台湾系島民が「そうそう、来てから、学校から覚えて。」と答えている。これは伝統方言に起因するかどうかの判断が難しいから△にした。伝統方言では、知識源(例:新聞で知った)にはカラが使われていた。このカラはその拡張ではないかと思われる。

これらのカラの用法の原因は「話者が外国人」だというよりも、周りの人がそれを使っている点にある。言ってみればこれらの用法はこの地域のネオ方言である。もちろん、元を辿れば、これらは琉球語を母語とする人々が標準語を習得しようとした際に生じた用法である。しかし、石垣の台湾系島民に、石垣や沖縄の伝統方言の理解度について質問したところ、彼らは伝統方言をほとんど耳にすることがない、聞いたとしても理解できないと話しているのである。上の5つのカラの用法は中間言語に起因すると言えばそうだが、それは台湾人の中間言語ではなく、琉球人の中間言語であった。

さて、ウチナーヤマトウグチとして説明できないカラの用法もある。ある話者が「三男カラ沖縄におる」と発言している。これは「三男から五男まで」というような意味ではなく、「三男は・・・」という意味だけである。

ウチナーヤマトゥグチにはこうした用法はない。発話の最後に文末詞のように使われるカラが「高校の先生カラ。」に見られる。引用表現の「と」と同じ用法で使われるカラが「農業やろうかなあカラよ」や「子供大丈夫かなあカラ心配する」といった発話に見られる。これら三つのカラはウチナーヤマトゥグチに見られない使い方である(ロング 2009)。

では、これらの「カラ用法」の原因は、話者が外国語(閩南語)を母語としていることにあるだろうか?それだけではないようである。というのは、同様の特徴は東京や関西など沖縄以外の地域に住んでいる台湾人には見られないからである。⁵

筆者は次の作業仮説の元で現在研究を進めている。すなわち、石垣の台湾系島民は、非台湾系島民が使っている日本語(石垣版のウチナーヤマトゥグチ)を耳にして、それを習得した。しかし、この日本語においてカラの使用範囲は標準語のそれを越えている。石垣版ウチナーヤマトゥグチにおいてカラの用法は拡張されているのである。この拡張用法の範囲の広がりが石垣台湾系島民につかめなかったためか、彼らは「カラ」の用法をさらに拡張していったのである。この過程を図1で示してみた。

⁵ 石垣の台湾系島民にみられる「カラ」の拡張は母語の影響ではないという積極的な証拠はないが、2006年10月の調査に同行した馮秋玉氏も同じ意見であった。彼女は閩南語を母語とする台湾生まれ育ちのL2日本語習得の専門家である。その意見は調査結果ではなく、本人の日頃の観察に基づいたものであるが、東京近辺で生活している台湾人の日本語にはこうした特徴はみることがないと言う。また2009年7月に行なった口頭発表の際に台湾人の日本語研究者数人にフィードバックを受けた際、彼らもこうした特徴を台湾や東京などで日本語を勉強している人からは聞いたことがないと言っていた。その中に、この「カラ」話者の母語である閩南語の干渉ではないかという憶測を話した人がいたが、それもロングが提示したデータへの反応であって、その人も実際にこの拡張「カラ」を台湾人からは聞いたことがないと証言していた。ということで、明確な反証が現れない限り、筆者は本稿で唱えている「ウチナーヤマトゥグチ」の影響であるという仮説は捨てがたい。

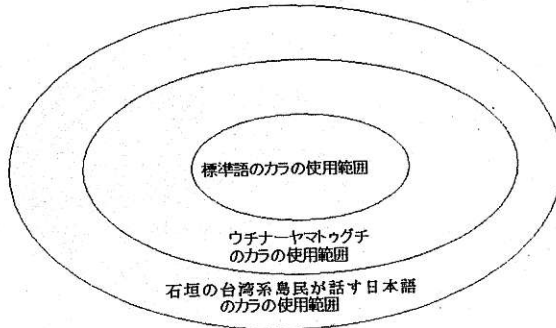


図1 三つの言語体系における「カラ」の使用範囲の比較

表11にある「カラの拡張用法」を追究するために「多面的な原因」(multicausality)を考えなければならない(Auer 他 2005)。その原因は(a) <当該地域が伝統的に琉球語が使われているところだから>でも、(b) <話者が閩南語母語話者だから>でもない。(a)と(b)の両方の条件が重なって初めてこうした中間言語の特徴が生じたのである。

7. 結語

本稿で日本の標準語と違う言語(英語, チャモロ語, 閩南語, 琉球語)を母語とする人で標準語を習得する人(日本語習得者)によって作り上げられた文法事項を見てきた。具体例を挙げながら, 中間言語の文法事項の分類を試みた。その結果を表12に示す。

表12 中間言語の下位分類

| 非母語話者が持つ第二言語の言語体系(広義の「中間言語」) | | | | | | |
|------------------------------|------------|------|------------|----------|--------------------|------|
| 正用 | 誤用 | | | | | |
| | 規則的な誤用 | | | | | |
| | 原因が母語にある | ? | 原因が目標言語にある | | その他の原因(分析的な方向への変化) | 原因不明 |
| 恣意的な誤用 | 母語干渉(負の転移) | 過剰識別 | パラダイムの合理化 | 過剰(その他…) | | |
| | 間接的干渉 | | 直接的干渉(直訳) | 一般化 | | |

この分類は出発点のみであり、「完成作品」ではない。例えば「原因が目標言語にある」ものの下位分類として、「パラダイムの合理化」と「過剰般

化」の二つを挙げたが、これ以外の種類もあろう。また、「過剰識別」の原因は母語にある場合とそうでない場合があることから、本稿ではその位置づけを保留にした。さらに、上で指摘した「より分析的な方向への変化」といった類は規則的でありながらも、原因が母語にあるとも、目標言語にあるとも言えないようである。また誤用が規則的でありながら、その原因を突き止めることができない「原因不明」の要素もある(迫田2002, 野田・他2001)。これらの背景には「言語本能」があり、言語の普遍性と関わっているのではないかと考えられる場合がある。今後、中間言語の具体的なデータの分析を通じてその下位分類をさらに追究していきたい。

参考文献

- 新井正人 (2008a) 「マリアナ地域における残存日本語の中間言語的特徴」 首都大学東京修士論文。
- 新井正人 (2008b) 「マリアナ諸島の残存日本語における名詞修飾構造の中間言語的特徴について」 『日本語教育学世界大会 2008 予稿集』 2, pp.409-412, Pusan, Korea.
- 大城朋子・尚真貴子(監修) (2007) 『日本語バイリンガルへのパスポート—沖縄で日本語教師をめざすあなたへ—』 沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会。
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク。
- かりまたしげひさ (2009) 「琉球クレオロイドの性格」 2009/11/29 の研究会レジュメ。
- 高江洲頼子 (1994) 「ウチナーヤマトウグチーその音声、文法、語彙について—」 『那覇の方言』 沖縄言語研究センター研究報告書 3, pp.245-289.
- 長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究—概観—」 『日本語教育』 81, pp.1-18.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林ミナ (2001) 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店。
- 松田良孝 (2004) 『八重山の台湾人』 南山舎。
- ロング, ダニエル・橋本直幸 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』 南方新社。
- ロング, ダニエル・新井正人 (2008) 「台湾系石垣島民コミュニティの言語使用状況」 『日本語学会 2008 年度春季大会予稿集』 pp.207-210.
- ロング, ダニエル (2008) 「マリアナ諸島の残留日本語の実態—拡散と収斂」 社会言語科学会。
- ロング, ダニエル (2009) 「第二言語習得者の中間言語と地域方言との境目—沖縄石垣島の台湾系住民コミュニティの「カラ」を例に—」 シドニーの ICJLE 日本語教育国際研究大会で行なった口頭発表。

- ロング, ダニエル (2010a) 「言語接触から」 報』 428, pp.1-30.
- ロング, ダニエル (2010b) 『小笠原の英語を教える三つの言語体系—』 南方新社。
- ロング, ダニエル・張守祥・張愛慶・石垣島 (2010) 「石垣島の台湾系島民の日本語」 『言語学』 30, pp.31-50.
- Auer, P., F. Hinskens and P. Kerswill (eds) (2007) *Divergence in European Languages*. Cambridge University Press.
- Long, Daniel (2007) *English on the Border*. Honolulu: University Press.
- Topping, Donald (1969, 1980) *Spoken English in Hawaii*. Hawaii Press.

付記 石垣の台湾系島民の談話

何仕事もやるよー。[どんな仕事も] う？ 頑張らんといかんから。(笑) ももう子供も大きくなったから。(子) 女一人、みんな四名。今長男がこっから沖縄におる。三男、あのお、高で嫁さん探しているから。

またもう、籍入れて、籍入れてから工場行かんから。畑買ってからギ作って、もう、牛も、やって、牛から、農業やってるさー。農業サトウキビも?) パイから、サトウた。もーサトウキビ作ってから大人夫探すも探されない。もーあれんが怖い、トゲあるから怖い。(笑) (あれ手で取ると、ね、切っちゃこよ。ハブいっぱいあるからよ、ね。)あるから作らんよ。(そうで

- ロング, ダニエル (2010a) 「言語接触から見たウチナーヤマトゥグチの分類」『人文学報』428, pp.1-30.
- ロング, ダニエル (2010b) 『小笠原の英語, 日本語, 混合言語—欧米系島民が使い分ける三つの言語体系—』南方新社.
- ロング, ダニエル・張守祥・張愛慶・石坂真央・今村圭介・塚原佑紀・田中節子 (2010) 「石垣島の台湾系島民の日本語—1 話者のケース・スタディー—」『日本語研究』30, pp.31-50.
- Auer, P., F. Hinskens and P. Kerswill (eds.) (2005) *Dialect Change: Convergence and Divergence in European Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. Durham, NC: Duke University Press.
- Topping, Donald (1969, 1980) *Spoken Chamorro*, 2nd. ed. Honolulu: University of Hawaii Press.

付記 石垣の台湾系島民の談話

何仕事もやるよー。[どんな仕事でもやるよ] 子供みんなお金使うでしょう? 頑張らんといかんから。(笑)もう、頑張って、何仕事もやるよー。ああ、もう子供も大きくなったから。(子供は、長男さん、次男さん・・・)男三名、女一人、みんな四名。今長男がこっちにおるさー。次男が大阪におる。三男から沖繩におる。三男、あのお、高校の先生から。沖繩に行ってから、沖繩で嫁さん探しているから。

またもう、籍入れて、籍入れてから自由できるでしょう? おやじもうパイン工場行かんから。畑 買ってから、農業 やろうかなからよ、もう野菜、ネギ作って、もう、牛も、やって、牧草もいっぱい植えて、もう、毎日頑張ってから、農業やってるさー。農業やって。(じゃ、そのパインも作ったし、サトウキビも?) パインから、サトウキビからあまり作らん。一年だけ作った。もーサトウキビ作ってから大変。キビ、タワシ時からよ、もう忙しい。人夫探すも探されない。もーあれ作らん。パインから、もー出来ない。パインが怖い、トゲあるから怖い。(笑。そうでしょうね)

(あれ手で取ると、ね、切っちゃうんですよね。)うん。あれパインの根っこよ。ハブいっぱいあるからよ、怖いさー。(あーそれもっと怖いですよ。ね。)あるから作らんよ。(そうですか。)今、こっち来たから、最初来たか

ら、本当大変さー。生活の、大変よ。(それ三十何年前でしたっけ?)ウチ来た時から、29からよ、今65。もー35、6年、35、6年なるよ。36年なるよ。(なるほどね、じゃ、それはアメリカから日本に返還して)サトウキビ作ってからも大変。

アメリカ時からこっち来てるよ。もう来たから、二、三年から[意味:来てから二、三年で返還]。最初来たからドル使うから。もうことばも分からん。お金のも使うのも分からん。自分の[欲しいの物から]よー、店に行って取って、お金から、財布のお金みんな出して、^{みせひと}店人から自分「あっ何買った、何買った、いくらある」。分かるでしょう?(うん)自分のお金取って、残りからまた返す。(二人笑う。)(じゃあその店の人も信頼できる人じゃないとだめですな)そうそうそう。もう、最初来たから、本当、部落人みんなやさしいよ。もう子供小さいから、畑行って昼ご飯食べてまたお家に帰って来てから・・・もうお昼ご飯食べて、お家帰ってから子供[大丈夫かなーから]、心配するでしょう?(そうですね)

帰って来て、隣のおばさんからよー、「いいよ、ご飯食べてから、もー少し休んでから、子供心配しないといいよ。」(やさしいですね)うん。「うち見ているよ。大丈夫よ。心配しないといいよ」って。本当、自分の婆ちゃんみたいぐらい。よかったよ。もう、^{ぶらくひと}部落人みんな自分の孫似てるさー[意味:自分の孫のように可愛がってくれた]。もう隣のお爺さんからあの、山いっぱいあるでしょう?畑行ってから、山に、何?ばんじろう?グアバ?あるから採って、ポケットを入れて、帰って自分孫あげないからよー。うちところ来たからも、「ねえねえ!子供は?」「お、子供家^{いえなか}中おるよ。なんで?」「おみやげ^{かなあ}あげる」必ず、どこ行ったからも、物あるからとって来てうち子供あげるよ。

(最終原稿受理日 2010年7月27日)